

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	27 / 2010 / 58-63
タイトル	グダリ沼周辺の花と蝶
著者名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

グダリ沼周辺の花と蝶

第10代 室谷洋司

はじめに

蝶の成虫の主要な食べ物は花々の蜜である。中には樹液とか腐敗した果実や鳥獣の糞汁を吸うものもあるが、多くは植物性の蜜である。一方、その幼虫の餌は多くは特定の植物の花や蕾、葉などで、シジミチョウ科の一部にアリの幼虫などを食べる種があるが、これは例外的なもので数えるほどしかない。

「自然を見つめる・やぶなべ会」では2009(平成21)年度の調査テーマを青森県八甲田山北麓の田代高原にあるグダリ沼周辺の生物調査としたが、筆者は長年、蝶の分布・生態を調べていることから、この標高約600mの高原にはどのような蝶が生息し、その季節的な消長とか生活はどうなっているのかに着目することにした。

しかし、たかだか1シーズンだけではまとまった成果が得られるはずもなく、ここではグダリ沼周辺に生息する各種の蝶の成虫はどのような花々に蜜を求めのか、季節を追って写真で記録することにした。

今シーズンの当地での調査日は5月2日、6月7日、7月12・20日、8月2・8・15日、9月20日、10月18日の9回であった。蝶は雨が降ったり風が強いと飛ばないので毎回、一定の成果を得ることは難しい。当地は2001年頃から年数回は来ていることから、それらの写真で一部補足することにした。

別項で石郷岡總一郎氏が当地の維管束植物の花について、可成りのパーセンテージを網羅してまとめたが、その殆どは昆虫などを引き付けている。そのなかで蝶は、“花と蝶”などと格好の景物として親しまれる存在である。しかしこれまでの調査記録を総合して見ると意外に限定された植物の花に好んで訪れることが分かった。

季節を追いながら、当地に発生する蝶類が好む花々を写真とともに掲げる。また、花との関係以外に調査を通じて気づいた興味深い生態上の知見も記録しておく。



[写真1] ブタナとウラギンヒョウモン(2008.7.10)



[写真2] ハナニガナとエゾスジグロシロチョウ(2009.7.12)



[写真3] ナワシロイチゴとコキマダラセセリ(2009.7.12)



[写真4] ウツボグサ・ナワシロイチゴ(奥)とコキマダラセセリ(2009.7.12)



[写真5] オクノミズギク群落。エゾスジグロシロチョウ(左)とモンキチョウ(右)(2009.7.20)



[写真6] オクノミズギクとモンシロチョウ(2009.7.12)



[写真7] オクノミズギクとメスグロヒヨウモン(2009.7.20)



[写真8] アジサイノリウツギとミドリヒヨウモン(2匹)(2009.7.20)

植物の同定では、細井幸兵衛氏から貴重な助言をいただいた。ここにお礼を申し上げます。

5～6月

5月2日は高標高に当たることから高原には一部残雪が見られ蝶の姿は見られなかった。6月7日は雨で蝶は飛ばなかった。

7月

12日と20日の2回の調査。高原には一気に草花が開花していた。蝶も種類数、個体数ともに多くが飛んでいた。観察ルートはグダリ沼駐車場から沼への遊歩道。ノイバラの白い花が目立ち乾燥したところにはブタナやハナニガナの黄色が目立つ。ノイバラへの訪蝶は見られない。ブタナ・ハナニガナにはウラギンヒヨウモン・エゾスジグロシロチョウ・モンキチョウなどが吸蜜する。

グダリ沼に向かって降りて行くとナワシロイチゴとウツボグサが混じって群落をつくり、沼に近い湿地にはオクノミズギク(※1)が独特の景観をつくっている。ここは、天候が良く発生期の適期に当たったことから蝶たちの楽園を形成していた。ウラギンヒヨウモン・メスグロヒヨウモン・エゾスジグロシロチョウ・モンシロチョウ・コキマダラセセリが花に群がり、とくにコキマダラセセリは個体数が多い。岸から沼の中央にかけて各所にオランダガラシ(※2)が密に生育しているが、この上をモンシロチョウがいたり来たりしているのは異様で、その白い小花にとまっては蜜を吸っている。しかし、オクノミズギクへの吸蜜頻度の方がはるかに大きい。

沼から離れ南東方向へ灌木の縁を行くとアジサイノリウツギ(※3)・ミヤマイボタ・オニシモツケが咲き多くの蝶を引き付けていた。アジサイノリウツギは灌木であることから存在感があり、普通種のメスグロヒヨウモン・オオウラギンズジヒヨウモン・ミドリヒヨウモンなどが数頭群がり、コキマダラセセリも吸蜜していた。黒っぽくて目立たないヒメウラナミジャノメの訪花も見られた。ミヤマイボタは散発的な分布で株数は多くないが、この花が放つ芳香はヒトの鼻にも心地よい。ヒヨウモンチョウの仲間やコチャバネセセリが忙しそうに口吻を伸ばしていた。

乾燥気味の草原にセイヨウタンポポ・シロツメクサの小規模な群落があったがコキマダラセセリ・モンキチョウが蜜を吸っていた。これまで見てきた蝶は、この地域に普通のものであるが、ナワシロイチゴに当地では初めてのヒョウモンチョウを見つけた。この種類は、青森県ではナガボノシロワレモコウを幼虫が食し、当地には小さな群落があるだけで個体数の少ないのは、それが理由と思われた。ただ、北海道ではエゾシモツケが食草になっていて、この近くにある近縁種オニシモツケにもその食草としての可能性を探る必要がある。

さらに東側へ行くと広い湿原が広がるが、その手前の緩斜面に小規模なヤナギランの群落がある。紅紫色のこの美しい花は、これまでの経験からあまり昆虫を呼ばないのではないかと思いながら、しばらくの間、ここで待つことにした。ところがその考えは見事に打ち破られた。モンキチョウがやって来た、コキマダラセセリが来た、極めつけはオオモンシロチョウが飛んできて蜜を吸い始めたのである。もちろん、オオモンシロチョウは当地では初記録である。

東南側に小川を渡ると広大な湿性草原で車道と駒込川が交叉する橋に至る。ここは初夏から秋にかけて色とりどりの花が咲くお花畑となる。6月まではコバイケイソウ、7月はタチギボウシやコオニユリの群落美しい。比較的乾燥した草原にはブタナやハナニガナが多い。タチアザミも咲いてきた。モンキチョウやヒョウモン類が各種の花々を訪れているが、コキマダラセセリの吸蜜行動に目を奪われた。モンキチョウなどの中型の蝶までは花に止まって口吻を伸ばせば蜜を吸うことができるが、コキマダラセセリは小型で花びらに止まったままでは蜜腺に口吻が届かない。姿が隠れるまですると花の中に入っていく。そこに別の個体が飛んできて先客に譲れと言わんばかりの行動を示す。一面がタチギボウシの群落で今が満開である。コキマダラセセリの発生が頂点に達し、それだけ個体数が多かったのかも知れないが、そんなに先を争う必要もないように感じられるのだが。(7月の花と蝶:写真1~12)



[写真9] ミヤマイボタとウラギンヒョウモン (2009.7.12)



[写真10] ヤナギランとオオモンシロチョウ (2009.7.20)



[写真11] タチギボウシとコキマダラセセリ。左側の1つの花に2匹、右側に1匹潜っている (2009.7.12)



[写真12] タチアザミとウラギンヒョウモン・コチャバネセセリ(手前右)・コキマダラセセリ(手前左) (2009.7.20)



[写真13] ノコンギクとクジャクチョウ (2007.9.23)



[写真14] オオアキノキリンソウとベニシジミ (2001.9.1)



[写真15] ヨツバヒヨソリとベニシジミ (2001.9.1)



[写真16] ミネアザミとオオウラギンスジヒョウモン (2009.8.15)

8月～9月

この季節はヨツバヒヨドリとアザミ類に彩られる。いくらか遅れてノコンギク・オオアキノキリンソウ(※4)が蝶たちの訪れる主要な花々になる。

ヨツバヒヨドリは南の地方から北国に渡ってくる蝶として有名なアサギマダラの吸蜜源で、八甲田山酸ヶ湯付近は大群がくることで知られる。当地にもときどき記録があるが大群に遭遇する機会はない。ベニシジミが好んでこの花で吸蜜していた。この蝶は、晩夏から秋にかけて咲くオオアキノキリンソウにも群がっていた。ノコンギクの大群落が至るところに見られる。これもモンキチョウ・クジャクチョウの格好のオアシスとなっていた。

高原の蝶たちにとって最も依存度の大きい吸蜜源はアザミ類の花で、当地にはアオモリアザミ・ミネアザミ(※5)などの群落が見られる。秋になって個体数が増加するイチモンジセセリが多数飛んでいる。6月下旬から7月に羽化したウラギンヒョウモン・メスグロヒョウモン・ミドリヒョウモン・オオウラギンスジヒョウモンは、9月に入って命の途絶える日が近く、羽がボロボロになっている。アザミ類で蜜を吸っては地表の枯葉などに産卵。近くには幼虫が食べるスミレ類があるはずだが、その詳細については未解明のままである。

できるだけ季節の進行にしたがって多く、ここを訪れようと考えていたが、天候の具合や時間不足から思うようにいかなかった。10月18日に訪れたがまわりは紅葉し、アザミ類も花期を終えていた。(8月～9月の花と蝶:写真13～18)

いくつかの知見と課題

標高約600mの高原は平地と比べて、春が遅く秋が早い。おのずと蝶の活動期間も短くなり、6月から数を増し7月から8月にピークをつくり、9月下旬には姿を消す。この4か月の間にどのような生活をしているのかは興味深いテーマである。“花と蝶”以外にいくつかの断片的な観察をしたので、詳細は今後の課題として簡単に記録しておく。

オランダガラシとモンシロチョウ 前から注目していたが、平地の畑地でキャバツなどの害虫として知られるモンシロチョウがグダリ沼周辺に沢山飛んでいる。この蝶の幼虫はアブラナ科の栽培植物を食べるが、ここでは沼面に繁茂するオランダガラシに依存しているものと思われた。産卵行動でそれを確認しようとしたが、7月から9月までの5回の観察でもその機会に恵まれなかった。オランダガラシは岸にもあるが多くは沼の中とか対岸にあり、長時間を双眼鏡などでフォローしなければならない。この植物の群落上を盛んに飛翔し、また白い花に吸蜜しているのが観察できたが(写真19)、産卵確認までは出来なかった。つぎの機会を待ちたい。

成虫の発生経過は、7月12日には1時間に10個体ほど観察し新鮮個体が多かった。8月8日でも同じぐらいの数で新鮮個体が多かった。8月15日は最も多く約20個体で中には破損した個体も含まれていた。9月の観察は1回だけで20日に5個体を確認し、新鮮だった。以上から7月に1回、8月に1回、9月に1回の少なくとも3回発生の可能性が考えられ、7月上旬以前に発生回数が追加されるかどうかが必要確認事項である。なお、越冬蛹からの羽化が一斉に行われるものかどうかについて、このような環境では越冬場所によって早い遅いに大きな違いが生ずる可能性があり、その後の卵・幼虫・蛹期の推移に大きなズレが出てくることも念頭におかなければならない。

キアゲハの発生は何回? 平地から低山地にかけてキアゲハはポピュラーなアゲハチョウの仲間であったが、近年は生息環境の悪化から個体数が減っている。グダリ沼周辺では確実に見ることができるが、これは周辺に食草が多いからだと思われる。幼虫はセリ科植物を食べ、当地にはオオバセンキュウ・エゾニユウ・ドクゼリが確認されているが、このうち前2種が食草となっている。ドクゼリも他地では食草としての報告があり、当地でも引き続き調査する必要がある。

幼虫の観察結果は、8月2日に終齢幼虫をオオバセンキュウから、同じく8月15日に3齢幼虫を、9月20日にエゾニユウから終齢幼虫を確認している(写真20)。これから推測するとグダリ沼周辺では6月から7月上旬の発生、7月下旬から8月上旬の発生、8月の下旬か



[写真17] アオモリアザミとイチモンジセセリ (2007.9.23)



[写真18] アオモリアザミ(白花)とイチモンジセセリ (2007.9.23)



[写真19] オランダガラシ群落と吸蜜するモンシロチョウ(中央右寄り)(2009.7.20)



[写真20] エゾニユウを食べるキアゲハ終齢幼虫 (2009.9.20)



[写真21] ウラギンヒョウモンの羽化、羽が伸びきっていない(2008.7.10)



[写真22] ウラギンヒョウモンの交尾(2009.7.20)

ら9月上旬の発生の可能性が導かれる。しかし平地では年に3回が標準的であることから、このような高地環境ではせいぜい2回程度と考えられ、前記のモンシロチョウの場合と同じく、当地における越冬蛹が置かれた場所などで成長経過に相当のズレが生じたのではないかと考えられ、これも今後の追究課題である。

ウラギンヒョウモンの交尾 ウラギンヒョウモンは他のヒョウモン類と同様、当地では6月下旬から9月に飛翔している蝶である。2008年7月10日12時過ぎに羽化を観察した(写真21)。周辺では多くの個体が見られたことから7月に入って多くの羽化が始まることが分かった。同日の12時34分、低い草本の葉上で交尾を観察した。2009年7月20日10時22分、背丈の低いウツボグサの花上で交尾を観察した(写真22)。

ヒョウモンチョウ類は8月下旬から9月にかけて地表に近い植物の茎や枯葉、あるいは樹木の樹皮などに産卵する。このことから、♀蝶は羽化直後の7月に交尾を終え、そのまま晩夏から秋まで活動し産卵に至るものか、あるいは産卵直前にも再交尾するものか関心が持たれ、今後の追究課題とした。

【注記】

- ※1:ミズギクの変種、※2:別名クレソン、※3:ノリウツギの品種、※4:アキノキリンソウの垂種、
- ※5:タチアザミの変種